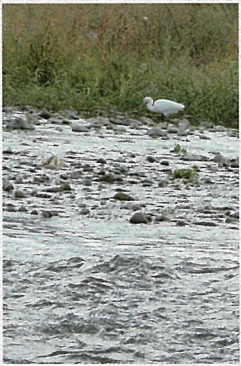
いとしい女性への思い―さらさらに

多麻川に　曝す手作　さらさらに
何そこの児の　ここだ愛しき
（巻十四―三三七三）

この歌は万葉集の東歌の部に収録されている武蔵国の歌で、「多摩川に曝す手作りの布のように、さらにさらにどうしてこの子がこれほどいとしいのだろう」と歌う内容です。

「多麻川」は東京都の多摩川を指します。「手作」は手織りの布をいいますが、『倭名類聚抄』に「白絲布、今案ふるに、俗に手作布の三字を用い、天豆久利乃沼乃と云ふ。」、また『新撰字鏡』に「紵弖豆久利」とあることから、麻を材料とした白い布と考えられます。当時、「賦役令」が規定する調には絹、綿、布などの品目があり、布の産地である武蔵国は調として麻布を納めました。また庸として男性には一年に十日間働く歳役労働が決められていましたが、二丈六尺の布を以て代えることもできましたので、武蔵国の人は麻布を代納したものと思われます。多摩川流域には今も調布の地名が散在し、かつてこの地が布の産地であった歴史を伝えています。


多摩川

「曝す」は布を水で洗い日に曝し漂白する過程をいいます。『常陸国風土記』に、曝井という泉の周りに住んでいる村の婦女が、夏の時季に集まって布を洗い、日に曝して乾かしている、という記述がありますが、布を洗い曝すことは夏に行われ、これは女性の仕事でした。東歌には、

筑波嶺に　雪かも降らる　否をかも
かなしき児ろが　布乾さるかも
（巻十四―三三五一）

という歌もあり、雪を見て歌ったか、布を見て歌ったか、いまなお解釈が分かれていますが、布を乾す女性への恋の思いを詠んでいることは間違いありません。

三三七三番の歌の作者が思いを寄せる女性も、多摩川でさらさら音を出しながら中央に献上するための布を曝していたと予想されます。動作のサラスから布を曝す音のサラサラを導き、サラサラから自然に更に更に増す恋の思いへと切りかえられていきます。つまり男の内面世界がサラサラの聴覚的感覚によって引き出されているのです。古代の生活のにおいを漂わせながら、〈景〉と〈情〉を巧みに表現した一首といえるでしょう。

（万葉古代学研究所主任研究員・曹咏梅）